
祈りと望み(レックス×ブリギッド)

エフリィ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

祈りと望み（レックス×ブリギッド）

【Nコード】

N1862B

【作者名】

エフリイ

【あらすじ】

ほのぼののレクブリSS。幼馴染設定な二人です。記憶を失ったブリギッドを、そのまま愛するレックス。イチイバルに、記憶回復効果^{ライフ}を付加。

アグストリアの一領地、マディノの北で、シグルド軍は悪名高いオーガヒルの海賊と戦っていた。

その最中、レックスは村人より「ブリギッド」と言う海賊の女首領の名前を聞いた。

かつて、その名前と同名の女性がグランベルのユングヴィにいた。

海賊どもにあっけなく勝利した後、

レックスはシグルドが海賊の女首領を仲間に加えたと聞き、探し、とうとう見つけた。

遠目からでもすぐに分かる、美しく風になびく金髪。

馬が近づいてくる音に相手が振り返る。

その顔はまさしくエーディンとうり二つだった。

唯一違うのは弓を持っていること。

胸が高鳴った。

自分を覚えているだろうか？

そばまで行くと馬から下りて、何か？と言う表情でこちらを見る女に話しかけた。

「お前がブリギッドか？」

「そうだ。お前は誰だ？何か用か？」

シグルドといい、この男といい、突然名前を呼ばれると驚く。

さっきの弓騎士など、不快な事に私を誰かと間違えていたのに。

「失礼、俺はレックス。シグルド軍の者だ。」

凄腕の弓使いといわれた奴にお目にかかりたくてな。」

ブリギッドは首を傾げた。弓に興味があるのかと思ったが、この男は斧を持っている。

「お前は弓使いではないだろう？」

「ハ、その通り。見ての通り斧を使っている。こいつは俺の家のし

きたりなんだ。」

「しきたり？生まれはどこなんだ？」

「グランベルのドズル出身だ。」

「ドズルのレックス？・・・？」

相手はほんの少し首をかしげ、すぐに元に戻ってしまった。

「どうした？」

「いや・・・」

どうやら、とレックスは一人ごちた。俺のことはわからないらしい。

「海賊に拾われたそうだが、辛いことは無かったか？」

「いや。拾ってくれた海賊の首領を、私は父と信じていたぐらいだからね。」

「そうか・・・」

「？」

自分を見るレックスの目がさらに優しくなり、少し戸惑う。

「あ、ああすまん。じゃ、宜しくな、ブリギッド。」

「ん？ああ・・・」

彼女の前から立ち去る時、

彼女が自分を覚えていないことにほんの少しだけ胸が痛んだが、生きていてくれたことが何より嬉しかった。

無理に思い出させることもあるまい。

これからは彼女が攫われたりしない様自分が守ってやればいいだけの話だ。

オーガヒルの海賊を制圧した後、シグルド軍はシレジアへ落ち延びることになった。

セイレーン城で暮らす事数ヶ月。

ブリギッドは双子の妹であるエーディンのお陰で

自分がユングヴィの公女である事をほぼ完全に自覚するようになった。

しかし、一つ問題がある。

聖弓のおかげなのかウルの血を分けた家族の事を思い出しても、

その他の事はほとんど思い出せていなかった。

例えば、自分が幼い頃に遊んでいた誰か。

「エーディン、ちょっといい？聞きたいことがあるの。」

「はい、何でしょうお姉様？」

エーディンが息子レスターを寝かしつけるのを待って近くの椅子に座った。

エーディンもその隣に座る。

「私の小さい頃を教えて欲しいの。」

姉の突然の申し出に少し驚いた。

「それはこの前オーガヒルで再会したときに・・・」

「そのことじゃなくて、彼との事なの。」

私はユングヴィの事しか思い出せてないし：

シグルド公子の事も、レックスの事も、私は本当なら知ってるはずでしょう？

レックスとの事ならやっぱり知っておきたくて。」

ブリギッドはレックスをしきりに気にしていた。

何故なら、彼が自分を事あるごとに守ってくれるのを知っていたから。

最初は何故なのだろうと思った。

理由を聞いても彼は笑うだけで、はぐらかされてしまう。

最初に声をかけられた時の事を思い出して考えていると、自分の過去に関係があるように思われた。

「ふふ・・・姉様ったら。でも無理に思い出さなくてもよいのでは？レックス公子が、

お姉様に昔のことを思い出させようとしないのがその証拠ではございません？」

「ええ。それは分かっているの。でも、気になるのよ。お願い。」

姉の不安そうな表情を見てエーディンは優しく微笑んだ。

姉がレックス公子を気にしているのをエーディンは知っていた。

「わかりましたわ」

そしてエーデインは話し始めた。

「初めてシグルド様やレックス公子達とお会いしたのは、4歳の時。父に連れられていったバーハラ王宮でのことでした。」

「そうなんだ・・・」

ブリギッドは一つ頷いた。

「レックス公子とお姉様は、最初はどっちからも話さなかったのです。」

お父様達が会議に行かれたときに私たち三人だけ取り残されてとても退屈でした。

そのうちにお姉様から彼に話しかけたのです。」

ブリギッドが身を乗り出した。エーデインは続ける。

「最初、（彼は当然私たちより詳しいですから）

お姉様が王宮内を案内してとだだをこねると、

レックス公子は面倒くさそうでしたが、

しぶしぶ姉様を知っている場所に連れて行ってくれる事になりました。

でも私は引っ込み思案で：公子は私にどうするのか聞いてきましたけど、

彼がぶっきらぼうなのが少し怖かったのもあって、残っていると行って行かなかったのです。」

ブリギッドは瞬いた。

「あなたを置いていってしまったの？悪い姉ねえ。あなたはどうしていたの？」

エーデインは、それを聞いて少し笑った後に続けた。

「私は一人で淋しくなっちゃがみこんでいました。しばらくして、やはりここに遊びに来ていた子ども達が私の所に来て声をかけてくださったの。」

それがシアルフィのシグルド様とエスリンです。

その後お二人も帰って来られて5人で遊ぶようになりました。お姉様も私も、

バーハラへお父様が行かれるたびにせがんでついて行くようになり
ました。」

「そうなんだ・・・」

「でも、5人で遊んでいたのは最初のうちだけでしたの。」

「え？」

ブリギッドは首を傾げた。

「レックス公子とお姉様はとても仲がよくなって・・・

公子にお姉様が付きまとっていたのですよ。

それが原因で口喧嘩もたくさんしてらして、よく私達はオロオロ
しました。

レックス公子は大人数で遊ぶのが苦手だと見えて、
すぐどこかへいなくなってしまうのです。

でも、姉様はそんな彼をいつも追いかけて行きました。

あとで姉様に聞いたらバーハラ付近の森で鬼ごっこをしたと聞いた
ことがあります。

私はレックス様がとても羨ましかった。

お二人がいない間、私はシングル様やエスリンと遊んでいましたが、
やはり淋しかったのですよ」

ブリギッドは目を見開く。

「まあ・・・私は全然覚えてないわ。」

エーデインは微笑んだ。

「最初にお会いできた時、私の事を覚えてらっしゃらなかったよう
に、

さらわれたショックで記憶が欠けてしまっているのでしょうかね・・・

でも、私がお二人について覚えているのもこんなことぐらいです。

姉様はすぐ彼を追ってどこかにいってしまっ・・・

レックス様を追いかけて行かれたはずなのに、

彼一人が帰ってくるなんてことも度々ありました。」

ため息をつくエーデインにブリギッドは苦笑した。

（私がさらわれたのもそのせいかな・・・。）

と心の中でつぶやいた。

「でも、よく覚えているのは姉様がなくなったのが分かったのが分かった
レックス公子が真っ先に探しに行くことです。」

「え？」

「私たちも召使もお父様たちに内緒で一生懸命探していたのに、
必ずレックス公子が姉様の手を引いて現れました。」

「・・・そうなの？」

「はい。・・・それが毎回のようにあるのでお二人のいたずらではな
いか？」

と言う噂もありました。」

「・・・さすがにそれは・・・」

——嬉しいような、恥ずかしいような。

でも自分がやんちゃだったと言うことはよく分かった。

「お姉様は見つかりにくいところにはかりいらしたの。」

わざと隠れているのではないかと噂になったぐらいでした。」

エーディンが微笑む。

「え？いくらなんでもそれは・・・」

「あ！そう言えばこんなこともありましたわ。」

それからエーディンは思い出す限りのことを話してくれた。

「フウ・・・」

自室に戻るなりブリギッドは溜息をついた。

どんな事を聞かされるかと緊張していた糸が一気にほぐれた。ベッ
ドに横になる。

（レックスは、どうしているのだろう。）

・・・ふと、側にある聖弓に目が止まった。

自分以外では使えない弓。

そして、ユングヴィの記憶を取り戻してくれた弓。

もしかしたら・・・！！

そっと手に取り、

力が流れ込んでくるのを感じながら枕元に倒れないよう立てかけて

みた。

そして記憶を取り戻してくれるのを祈りながら目を閉じた。
しばらくしてブリギッドが寝付く頃、弓身がぼんやりと光り始めた。
ブリギッドの前に幼く、そして一生懸命木に登ろうとしている一人の少女が見えた。

『きっと来るわ。いつもそうだった。今度は簡単に見つからない』
(これは・・・？・幼い時の私？・・・。)

少女の意識と、今の自分の意識の両方が分かることに何故か疑問は感じなかった。

『まだかな？早く来てよ』

(選んだのは木の枝の上だった……。もうめばしい所は見つかったから・・・)

『ちゃんと見つけてね。』

(でも彼はなかなか来なかった。

そして自分も段々降りるのが怖くなって：枝にしがみついて目をつぶってたんだっけ：)

『いねえなあ……。』

(草を掻き分ける音をさせながら男の子のつぶやく声がして、目を開けたらやっぱり彼だった。)

『レックス！！！』

隠れたがっていた少女が助けを求めるのを聞いてブリギッドは苦笑した。

(その後彼が助けに来てくれて……。あ、落ちてしまった。

フフ、必死に男の子を起こそうとしてる。)

『何であんな所にいるんだよ！！』

青髪の少年が少女を怒っている。

『だって……。』

少女は口ごもり、その後が続かない。

(さすがに、探しに来てくれるのが嬉しいからとは言えないな。)
『レックス怒らないで』

力なく少女が言う。

『レックス』

少女は少年の顔色をうかがいながら恐る恐る彼の手を握った。
少年は特に少女の手を離すこともせず、そのまま来た道を歩き始める。

少女の目が、とても嬉しそうに少年の顔を見つめるのが印象的だった。

『ねえレックス・・・私・・・』

少女が何か言おうとした。

——コンコン、と言う小さい音で目を覚ました。

「誰だ・・・？」

眠そうに扉を開けるとレックスだった。

「悪い、起こしたか？」

「いいえ」

彼が、自分を不思議そうに見つめてきた。

「何故、イチイバルを持ってるんだ？」

「あ、ごめんなさい。ちょっとね」

いつの間にか聖弓を握っていたのだ。慌てて聖弓を元の位置に戻す。

「いや、別にかまわないんだがな」

「どうしたんだ、何か用か？」

「ジャムカとエーディンが、今度4人でお茶会でもしないかとさ。」

それでお前に返事を聞いてくれてるんで来たんだ」

エーディンたら、とブリギッドは心の中でぼやいた。

「それもいいね。あ、立ち話もなんだ、ちょっとあそこに座らないか？」

ブリギッドはセイレーン城の中にあるテラスを指差した。レックスが頷く。

「さっきイチイバルを持ったまま寝ていたのは、夢を見る為だったんだ」

レックスが肩をすぼめた。

「へえ。で？いい夢は見れたのか？」

「うん、少し不思議な夢だった。自分が小さい女の子になっててさ、どこかの森の中で隠れるために木の枝に登ったの。」

女の子が考えていることも分かったよ。自分が見つからない事がわかれば、

自分の大好きな男の子が必ず探しに来てくれることを知ってるんだ。それが嬉しくて何回か同じ事をしてみたい。悪戯っ子よね。」

まあ、結局はその男の子を待ってる夢だった。」

そう言いながらブリギッドは笑った。

「偶然だな。俺は、女の子を探す方の夢なら見た事がある。」

レックスが珍しく話に乗ってきた。

「偶然。どんな夢なの？」

「いつもはしつこいぐらい付きまとって来る女の子が、よく突然いなくなるんだ。」

元いた場所に戻ってみてもいないから、心配になって探す。そう言う夢だよ。」

「その子は、今どうなっているの？」

レックスが不意に、ブリギッドから視線を逸らした。

「別に、ただの夢だろう？」

ブリギッドはくすりと笑う。

「そうだね」

窓の外では、雪が舞っている。さっきより勢いが強くなったようだ。

「：相変わらず冷えるな、シレジアは」

ブリギッドがぶるっと体を震わせると、レックスが外套をかけてくれた。

「一つ、言い忘れていたことがある。」

「何？」

外套を頭から被っているの、彼の表情が見えない。

「俺もその女の子が好きだった。だがその後しばらくして本当にいなくなってしまった。」

それを知った時・・・少しだけ泣いた。」

「レックス・・・」

それから二人は一言も話さないまま、それぞれの部屋へ戻った。
その夜、二人が見た夢は。

少年は、少女と顔を合わせずに、

だが緊張して冷たくなっている少女の手をギュッと握り返し、
そのまま来た道を歩き始めた。少女の目が嬉しそうに少年の顔を見
つめる。

「ねえレックス・・・」

「何だよ。」

無然とした表情で少年が返事をする。

「あのね・・・その、探しに来てくれてありがとう。」

「もう慣れたぜ」

短い返事だが口調にはずいぶんトゲが無くなっている。

「大好き・・・。」

少女がボソッとつぶやいた。

「何か言ったか？」

「何でもないよ!!! 早く行こう! ね!？」

暗いはずの室内で、

聖弓だけが今にも消えそうなぐらいの弱い光を放っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1862b/>

祈りと望み(レックス×ブリギッド)

2010年10月28日03時23分発行